

# 『ペリクリーズ』にみる雄弁な女性たち

大阪芸術大学 文芸学科 教授 団野恵美子

16世紀から17世紀にかけて、約150年もの間、イギリスでは女性向けの日常生活の手引書、女性の地位に関する論説や説教集、礼儀作法書が出版されてきた。父権制社会における女性の立場や結婚について、家庭生活手引書などの影響があることは、エリザベス朝演劇の端々に明白である。

シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の『ペリクリーズ』(Pericles, 1607-1608)では、タイアの王ペリクリーズが、近親相姦のアンタイオカス父娘が求婚者に要求する謎解きに挑戦するところから苦難の旅を始める。シェイクスピアのロマンス劇は悲喜劇の一種で、探求の旅に出る英雄たちの物語であり、別れ別れになった家族が最後にめでたく再会するという話が基調となっている。旅の途上で魔法の薬草、運命や神々の力を借り、離散家族が再会し、悲しみが喜びへ別離から和合へと進む。家父長制社会において女性は沈黙と忍耐が美德とされた中で、ペリクリーズの娘マリーナ、ターサス太守の妻ダイオナイザ、ミティリーニの娼館女将は雄弁で行動的である。男性中心のロマンス劇の中で、要求を通すために言葉を武器として語る女性たちに注目すると、一見おとぎ話的な世界に見えたものが、皮肉にも現実感が伴う劇作品だとわかる。

## 1. 劇の概要と特徴

タイアの王ペリクリーズは、王アンタイオカスの美しい娘の求婚者として名乗りを上げるが、課題の謎を解き王と娘の近親相姦を見破る。命を狙われたペリクリーズは国へ逃げ帰り、自分の国を守るために外国であるターサスに海で向かう。食料を大量に提供したためターサスの太守クリーオンと妻ダイオナイザに感謝され信頼関係を結ぶが、またも刺客の追手を逃れるためにペンタポリスへ向かう。難破して漁師に助けられた後、ペンタポリスの王が催す馬上槍試合に出場して勝利し、王娘タイーサと結婚する。

故郷からの知らせで、ペリクリーズがタイアの王だと周囲に発覚し、身重のタイーサと帰国の海路で再び嵐に会い、タイーサは娘マリーナを生んだ後、仮死状態に至る。ペリクリーズは妻が亡くなったと信じて耐水性の棺に入れて海へ流す。タイーサはエフィサスの地に漂着した後生き返り、ダイアナ神殿の巫女となる。娘マリーナは故郷へ帰る途中のターサスでクリーオンとダイオナイザに預けられる。

14年の月日が経ち、マリーナは美しさと優秀さに嫉妬したダイオナイザの命で暗殺されるところを、海賊にさらわれミティリーニの女郎屋に売られる。クリーオンは訪ねてきたペリクリーズにマリーナの偽りの死を伝え、ペリクリーズは絶望したまま海を流離いミティリーニへ寄港する。

ミティリーニの女郎屋では、マリーナの美しさに客は絶えないが、聡明な彼女は客の不道徳を諫めて

改心させ商売にならないと女将を激怒させている。総督ライシマカスと交渉し、技芸で生計を立てられるようになったマリーナは、歌声でペリクリーズの生きる力を呼び覚まし親子の再会が叶う。ついに女神ダイアナの導きで、巫女のタイーサにも会えた。

詩人ガワーが物語の進行役を務め、ペリクリーズが危険な航海をして各所で冒険を行いながら、妻と娘を一旦失い、再び手に入れて故郷に戻るという筋立てである。ペリクリーズの才覚だけでは乗り越えられない難関が待ち受け、運命や超自然的な力が働いているが、男性中心のロマンス劇の中で、要求を通すために言葉を武器として語る女性たち、貞節と勇気のマリーナ、悪女ダイオナイザ、口喧しい女将の存在がリアリティを増している。

## 2. 癒しの言葉とマリーナ

生まれてすぐ両親と生き別れ、クリーオンとダイオナイザに養育されたマリーナは、歌舞や機織り、刺繍など諸芸に秀でて、実娘を案じたダイオナイザの嫉妬を買う。「白雪姫」のように暗殺されそうになった時、彼女はその理由を問う。「なぜ私を殺させるのか」「生き物を傷つけたこともない私が危険なのか」と聞いた後、「喧嘩の仲裁に入るという立派なことをするあなたが暗殺するわけがない」と相手の良心を目覚めさせる言葉を投げる。これは後に女郎屋の客が、「清く正しいことに目覚め」「尼僧の讚美歌を聞きに行こう」というほどマリーナの言葉に道徳心が蘇った力があることを示す。

ライシマカスにも「名誉ある家柄ならそれを示し、立派な人だと思っている人々を裏切ってはいけない」と肉体関係を拒み、客引きボールトから犯されそうになると「下水のたまり場のような職から足を洗って、私が技芸を教える手伝いをして」と交渉する。悲嘆にくれるペリクリーズの治療として、マリーナが引き出される時、「あの娘なら王から言葉を引き出せるでしょう」「耳の城門に砲撃を仕掛け、突破口をつけてくれる」と称されることから、マリーナの言葉は人の心を揺さぶる力強さがあることを証明している。

## 3. 旅路の果てにある再会

五幕一場の親子再会の場面では、マリーナがタイーサの娘である証拠を一つずつ確認していく。容貌、声、瞳と瞼、歩く姿がタイーサを彷彿とさせ、両親のこと、身の上話、マリーナの名の由来、乳母の名前、ターサスからミティリーニに来た理由などを何度も話させる。力強い癒しの言葉をもつマリーナが、過去の出来事を語ることで、身分証明をするだけでなくペリクリーズの痛みを癒し、最後に母の名を言うことで母との再会も実現化するのである。